

「司馬遼太郎の時代」と サラリーマンの教養文化

立命館大学
産業社会学部 教授

福間 良明



今年、司馬遼太郎生誕100年、没後からでも27年が経過している。それほどの年月を経てもなお、司馬作品は広く読み継がれている。代表作と目される『坂の上の雲』は、累計1,976万部を超えており、経営者やサラリーマンの愛読者も多い。『竜馬がゆく』に至っては、それを上回る2,500万部近くに及ぶ。戦国期を扱った『国盗り物語』『新史太閤記』、中国・漢の成立を描いた『項羽と劉邦』も、根強いロングセラーとなっている。

だが、司馬作品はさほど読みやすいものではない。随所に「余談だが…」との断りがなされ、史的背景の叙述やアジア史・昭和史などの対比が多く織り込まれている。読み手にしてみれば、物語への没入感を断ち切られ、いささか小難しい「歴史」に向き合わされることになる。にもかかわらず、司馬の歴史小説は多くの読者を獲得した。そのことは、司馬作品が「歴史」という教養への関心を掻き立ててい

たことを示唆する。

ちなみに、司馬作品が多く単行本化されたのは1960年代だが、それらが文庫化され、読者が持続的に生み出されるようになるのは、1970年代後半から80年代前半、すなわち「昭和50年代」のことである。その時期には、『歴史読本』『歴史の旅』など、総合雑誌スタイルの一般向け歴史雑誌が盛り上がりを見せた。ビジネス誌『プレジデント』が歴史人物路線にシフトしたのも、同時期である。目先の実利に直結しない「歴史」にあえて向き合い、それとの対比で現代社会や自らの「生き方」を問い直す。こうした営みが、サラリーマン層のあいだで広く見られた。それを牽引したのが、司馬作品だった。

むろん、司馬の歴史叙述のすべてが、実証史学に照らして、史実に沿うわけではない。それでも、古代史から中世史・近代史までをも見渡し、文化や社会を多角的に読み解こうとする思考実験には、汲むべきものもあるだろう。その関心の延長で、専門研究者の手による新書や概説書を手にした読者も少なくはなかったはずである。日常実務のみに閉じるのではなく、「歴史」にふれながら社会や文化を長いスパンで捉え返そうとするサラリーマン文化が、かつては見られた。

とはいえ、司馬作品に何が読み込まれ、

何が見落とされたのか。そのことを顧みる必要もあるだろう。少なからぬ読者は、司馬作品の「明治の明るさ」に惹きつけられた。日露戦争を扱った『坂の上の雲』が多く愛読された理由も、そこにある。しかし、司馬の歴史小説は、そのみを強調したわけではない。藩閥のひずみをはじめ、明治社会の桎梏しごくも色濃く描かれていた。何より、不合理や組織病理に覆われた昭和陸軍への批判は、司馬作品の基調をなしていた。むろん、それは司馬の戦車兵体験に根差していた。だが、これらは往々にして見過ごされがちだった。こうした読みが、近代日本史の負の側面から目を背けることにつながったことは否めない。

苦い歴史にも向き合いながら、文化や社会を長期的な視野で捉え返し、あるべき姿をいかに模索するのか。司馬作品とその読書文化史は、こうした問いの重さを、現代のわれわれに語りかけている。

福間 良明(ふくま よしあき)

1969年、熊本県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究所博士課程修了。博士(人間・環境学)。出版社勤務、香川大学経済学部准教授を経て現職。専門は歴史社会学・メディア史。著書に「働く青年」と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ」(筑摩選書、サントリ学芸賞受賞)、『「戦跡」の戦後史——せめぎあう遺構とモニュメント』(岩波現代全書)、『司馬遼太郎の時代——歴史と大衆教養主義』(中公新書)など。